

平成24年度 第2回研修会

「多文化共生を進める 人材の育成について」

平成25年2月12日（火）14:00～16:30
地球市民かながわプラザ研修室A

平成24年度かながわ自治体の国際政策研究会 第2回研修会
多文化共生を進める人材の育成について

日時：平成25年2月12日(火)14:00～16:30

場所：あーすぷらざ 研修室A

次 第

1 講演会 (14:00～15:00)

第1部「外国人住民の抱える課題と支援について

～カンボジアのコミュニティの事例から～

講師：富本潤子氏（かながわ国際交流財団職員）

萩原カナナ氏（かながわ国際交流財団 多文化サポーター）

第2部「実践事例の紹介 ～諸課題解決のための試み～

かながわ国際交流財団の取り組みの中から」

講師：富本潤子氏

森ちえろ氏（かながわ国際交流財団職員）

2 グループワーク（多文化共生施策企画シミュレーション）（15:10～16:30）

第1グループ 通訳・翻訳・相談対応

第2グループ 多言語情報の共有

第3グループ イベント・外国人セミナー・研修会

第4グループ 調査事業

進行・講評：富本潤子氏

森ちえろ氏

萩原カナナ氏

外国人住民の抱える課題と支援について
～カンボジアのコミュニティの事例から～

萩原カナナ

富本潤子(かながわ国際交流財団)

【1】神奈川県内に住むカンボジアの人々

2011年12月31日現在の「外国人登録者市(区)町村別主要国籍(出身地)別人員調査票」より作成

| | | | | | | | | | | | |
|----|--------|-----|----|----------|----|----|--------|---|-----|--------|-------|
| 1 | 相模原市 | 309 | 11 | 藤沢市 | 49 | 21 | 横浜市戸塚区 | 5 | 31 | 横浜市南区 | 1 |
| 2 | 平塚市 | 258 | 12 | 川崎市 | 34 | 22 | 横浜市緑区 | 5 | 32 | 横浜市金沢区 | 1 |
| 3 | 大和市 | 175 | 13 | 横浜市中区 | 22 | 23 | 横浜市青葉区 | 4 | 33 | 逗子市 | 1 |
| 4 | 横浜市泉区 | 137 | 14 | 伊勢原市 | 21 | 24 | 横浜市港北区 | 3 | 34 | 南足柄市 | 1 |
| 5 | 厚木市 | 92 | 15 | 座間市 | 17 | 25 | 横浜市磯子区 | 3 | 35 | 湯河原町 | 1 |
| 6 | 秦野市 | 92 | 16 | 横浜市神奈川区 | 11 | 26 | 茅ヶ崎市 | 3 | 36 | 三浦市 | 1 |
| 7 | 愛川町 | 75 | 17 | 横須賀市 | 11 | 27 | 横浜市栄区 | 3 | 37 | 大磯町 | 1 |
| 8 | 綾瀬市 | 73 | 18 | 海老名市 | 10 | 28 | 横浜市鶴見区 | 2 | 合 計 | | 1,559 |
| 9 | 横浜市瀬谷区 | 67 | 19 | 横浜市保土ヶ谷区 | 6 | 29 | 横浜市港南区 | 2 | | | |
| 10 | 横浜市旭区 | 55 | 20 | 横浜市都筑区 | 6 | 30 | 小田原市 | 2 | | | |

【2】カンボジアの人たちと関わって

3つのタイプ

難民として来日した人たち(主に50～60代)

結婚・呼び寄せ等で来日した人たち(主に20～30代)

日本生まれの子どもたち

情報の伝達について

翻訳資料の有効性

通訳の役割

「ちょっとおせっかい」

カンボジアコミュニティのこれから

子どもたちのこと

おわりに

(公財) かながわ国際交流財団
事業実施報告書

- 1 事業名 外国人住民総合支援モデル事業
- 2 ねらい 県内に暮らす外国人住民が直面することが予想される様々な生活上の課題を事前に予防・軽減するために、日本で暮らしていくに当たって必要な生活設計に関する基礎的な情報等を外国人住民に提供する。
- 3 日時 2012年11月18日（日） 13:30～15:30
- 4 場所 平塚市横内公民館
- 5 講師 山口章子氏（神奈川県金融広報委員会金融広報アドバイザー）
- 6 参加者 計 18 名（カンボジア語 9 名、スペイン語 3 名、ポルトガル語 2 名、ベトナム語 1 名、タガログ語 1 名、中国語 1 名、日本語 2 名）
- 7 実施内容
 - 1) 生活設計とは（家計簿について：収入・支出を知る）
 - 2) 将来必要となるお金：教育資金、住宅資金、老後資金、その他の資金
 - 3) 資金作りのためにすること
 - 4) 契約をする際の注意点
 - 5) 質疑応答

8 写真



講師の山口氏



和室前方（カンボジア・中国・日本の方々）



和室後方（ペルー・ボリビア・ブラジル・ベトナム・フィリピンの方々）



親を待つ間、会議室で高校生と勉強したり遊んだりした子ども達

9 総括（ねらいの達成について、良かったこと、課題など）

将来必要となる資金の全体像を参加者は把握することができた。また、家計簿をつける習慣のない国出身の参加者のほとんどだったので、家計簿をつけるということや、将来の不足金額を知り、そのために貯蓄をするという考え方は、多くの参加者にとって新しい情報となった。ただ、セミナーで提供された情報以外にも参加者が知りたいことがあり、年金や保険のことに質問が出たが、平塚市の制度ということもあり、講師の山口氏が全て回答することは難しかった。市の担当者がセミナーに同席することができたら、参加者にとって必要な情報をもっと多く提供できただろう。参加者層も幅広く、子どもが既に高校まで進学していたり家を購入している参加者がいる一方、単身世帯の若者もいた。このような場合、それぞれの参加者にとって必要な情報も異なるので、テーマを狭くして参加者層を限定した方が、それぞれの参加者が得られることが多いだろう。

10 参加者の感想

<ポルトガル語>

- ・毎日の出費について知っておくべきこと、気をつけることがよく分かりました。貯蓄の大切さも実感しました。（特に保護者にとっては、子どもの教育のために）
- ・お金のことについての話はとても勉強になりました。自分の子どもはもう学校を卒業していて、当時は教育費についての情報はほとんど得られませんでした。セミナーを聞いて、自分の色々な決断が間違っていないことを知り安心しました。
- ・私の家の経済状況や子どもの滞日期間も短さもあり、私立ではなく公立志向でした。私自身の疑問も色々と解消することができたので、日本の学校に入る予定の子どもがいる友達にも情報を伝えたいと思います。

<スペイン語>

- ・初めてこのようなセミナーに参加しましたが、とても勉強になりました。子どもの教育にかかる費用についても初めて知りました。
- ・大学進学費用についてももっと知りたいです。学部によって費用が違うのか、また、大学の入試制度についても知りたいです。
- ・高校や、大学進学対策について知りたいです。また、経済に関するセミナーにももっと参加したいと思います。
- ・このようなセミナーに参加するのは初めてでしたが、色々な情報が得られて良かったです。お金のことだけでなく、大学進学や大学生活についての情報も欲しいです。

<中国語>

- ・どうしたらもっと貯蓄できるのかや、家計ノートの付け方についてもっと知りたいです。

<カンボジア語>

- ・カンボジア語の相談窓口が欲しいです。今日は通訳がいて良かったです。
- ・契約書にサインする際に注意することを知ることができて良かったです。
- ・日々の生活が苦しい、といったことはどこに相談したら良いのでしょうか。

<ベトナム語>

- ・長男が高校1年生で留学して英語を勉強をしたいと思っています。平塚市の仕組みで留学などができるのか知りたいです。

<タガログ語>

- ・年金についてもっと知りたいです。現在障害年金を受け取っていますが、生活費やフィリピンでまだ学校に通っている子ども達への仕送りでお金がなくなってしまい、貯蓄ができる状況ではないのに、将来もらえる年金は4万円と聞いています。どうしたら良いか、市役所にも相談したいと思っています。

<日本語>

- ・質疑応答で「市役所に相談」という回答になるようなものも複数ありましたので、行政の担当者（税金、生活保護、教育等）が講師の補助のような形で参加するとより効果的なものになるのかなと思います。
- ・講師の方の話を区切って通訳するまでが長くなってしまったところもあったように思いますので、複数の言語の通訳が同時に訳す際、その点が進行において一つネックになるように感じました。

(公財) かながわ国際交流財団
事業実施報告書

- 1 事業名 外国人住民総合支援モデル事業
- 2 ねらい 県内に暮らす外国人住民が直面することが予想される様々な生活上の課題を事前に予防・軽減するために必要となる保健分野に関する基礎的な情報を提供する。
- 3 日時 2012年11月25日（日） 13:30～16:00
- 4 場所 平塚市横内公民館
- 5 講師 ジョゼ・アラウージョ・リマ・フィーリヨ氏（現地NGO・EPAH代表）、
岩木エリーザ章子氏（ブラジル国臨床心理士）
佐々木あづさ氏（平塚市役所健康課保健師）
- 6 参加者 計 13名（スペイン語 7名、ポルトガル語 5名、中国語 1名）
他、通訳 2名（スペイン語、日本語）
- 7 実施内容
 - 1) 医療へのユニバーサルアクセスについて（日本の医療制度・ブラジルの医療制度）、
HIV感染症や癌などの病気と共に生きる経験（フィーリヨ氏）
 - 2) 移住者の精神面の健康について（岩木氏）
 - 3) 予防接種や検診等の市で受けられる保健サービスについて（佐々木氏）
 - 4) 質疑応答

8 写真



車座になって自己紹介



講師のジョゼ・アラウージョ・リマ・フィーリョ氏（左）と岩木エリーザ章子氏（右）



保健師佐々木氏からの説明

9 総括（ねらいの達成について、良かったこと、課題など）

少人数の参加者ではあったが、そのため参加者が発言しやすい雰囲気となり、互いの意見や気持ちを共有することができてよかった。最後に市のサービスを市の担当者から直に伝えてもらう場があり、検診などに関する郵便物（封筒も中身も日本語）がどういったものか（何色の封筒か、いつ頃届いているかなど）を確認することができた。今回のセミナーは18日に実施した第1回外国人住民向けセミナーに続いて2週連続となったこともあり、広報の時間が長くとれなかったことから、参加者の獲得が難しかった。

10 参加者の感想

<スペイン語>

- ・家庭の事情で、2:30 すぎにつきました。皆さんの意見を聞いて、健康や教育についての情報の大切さを感じました。通訳は、単に言葉を訳すだけでなく、誤解を招かないために両方の（国の）習慣を知っていることが重要だと思います。
- ・平塚市の行政サービスについてよく分かったのがためになりました。
- ・私には学校（保育園）に通う娘が2人（と息子が1人）います。長女には病気があり治療中ですが、学校に通っています。次女は元気で、長男も問題ありません。

<ポルトガル語>

- ・心と体の健康、市役所のサービスの3つについて知ることができ、とても有意義でした。
- ・もっと多くの方が学び、意識を高めるセミナーを期待しています。

かながわ自治体の国際政策研究会研修事業 2013/2/12

多文化共生を進める 人材の育成について



(公財)かながわ国際交流財団(KIF)
富本潤子 森 ちえろ

平塚市内での財団の事業について

2009年10月～2011年12月
平塚かけはし教室
(文部科学省「定住外国人の子どもの就学支援事業」受託)



平塚市内での財団の事業について

2011年11月～
「国際教室支援及び
学習支援事業」
小中学校への学習支援
サポーター派遣



2012年8月～
「よこうち宿題教室」
ボランティアによる
放課後宿題教室



外国人住民調査

(対象)カンボジア、ベトナム、中国、ボリビア、ペルー、
ブラジル等の家庭

[就労] 雇用形態、収入
(例) ハローワークではなく、口コミで就職。非正規雇用

[金銭面] 母国の送金の有無、貯金の有無
(例) 新車を購入したので保険料が払えない

[制度利用] 保健福祉制度、保険加入率
(例) 110/119番知らない(外国人は利用できないと思っていた)

[育児・教育]
(例) 親子の意思疎通、障がいがある場合、低学力

[情報]
(例) 母語で相談できるところがない。友人・親戚頼み

[将来]
(例) 子どもはできれば大学に。日本に住み続けたい。

分野横断的な連携が必要であること 福祉的な視野が必要であること

検討委員会

- 平塚市(文化交流課)
- 通訳翻訳バンクコーディネーター
- 平塚市教育委員会(指導室)
- 平塚市社会福祉協議会(ボランティアセンター)
- 学識経験者

事業協力: 平塚市(子ども家庭課、保健センター、保育園)
平塚市立小中学校、校長会
自治会、公民館、学童保育、食材店・レストラン
(財)日本国際協力センター

多文化サポーターの派遣

外国人住民だけで解決することが難しい場合に派遣。

(例) 保健師・社会福祉士の家庭訪問
保育園入園前の面談
公営住宅申込み手続き
不登校傾向の子どもの自宅訪問
養護学校での相談
病院での栄養指導
病院での検査結果報告

研修を通じた意識啓発

平塚市保健福祉研修
 (福祉部および健康・子ども部職員、社会福祉協議会職員等)
 民生委員地区会長会議・民児協理事會
 (市内民生委員・主任児童委員)
 小中学校人権教育研修(校内全職員)
 平塚市国際教育連絡協議會
 (日本語指導協力者受入校)
 通訳・翻訳ボランティアバンク



多言語情報の流通 自動翻訳の活用



多言語情報の流通 メールやインターネットの活用

多言語情報メール配信サービス
 INFO KANAGAWA
 (生活情報や緊急時の
 多言語による情報提供)

- ・スペイン語
- ・ポルトガル語
- ・英語
- ・中国語
- ・タガログ語
- ・やさしい日本語



多言語情報の流通 資料の翻訳、情報の共有

市内で統一して使える多言語情報の作成
 県内で共有できないか

- (例)
- 防災時の対応
 - 成績表
 - 保育園
 - 入学説明会



外国人向けセミナー

ライフプランセミナー

収支バランスや進学に必要な費用等
 について

関心は高いが、コミュニティによって
 ニーズが大きく異なる。



外国人向けセミナー 教育ガイダンス

小学校～大学まで
 各段階でのポイント、
 諸経費について

工夫：
 カトリック教会と連携
 facebook等で広報



外国人向けセミナー

介護のしごとをめざす外国人のための
ワークショップ

介護の仕事について、体験談も
交えて紹介

協力：

外国人介護従事者
育成に関わる機関



外国人向けセミナー

健康・保健セミナー

検診などに行く機会が少ないため、
心と体の健康を保つためのポイントを説明
平塚市保健センター職員の参加を依頼。
無料で受けられる検診等の情報提供



「災害多言語支援センター設置訓練」
「自主防災訓練」
(自治会の訓練に参加)

神奈川県の委託事業として
平塚市で実施

2013年平塚市の地域防災計画に災害
多言語支援センターの設置が盛り込まれる。



地域内での「居場所」「拠点」づくりの可能性

グループワークを通じて考えてみましょう
行政内の横断的な連携
関連団体との連携
外国人住民の手に情報が届く工夫
制度活用を進め、課題を解決する
アイデア

平成 24 年度第 2 回研修会記録

第 1 部「外国人住民の抱える課題と支援について～カンボジアのコミュニティの事例から～」

講師：富本潤子氏（かながわ国際交流財団職員）

萩原カナナ氏（かながわ国際交流財団 多文化サポーター）

富本氏 公益財団法人かながわ国際交流財団の富本です。今日は第一部でカンボジア出身の萩原カナナさんの方にお話を聞きたいと思いますが、私がインタビューをしながら、お話の方を進めさせていただければと思います。どうぞよろしくお願いします。みなさんのお手元に A4、1 枚でカンボジアコミュニティの事例からという紙をお配りしていると思いますが、そちらを参考に進めていきたいと思っています。では、萩原さんの方から自己紹介をお願いします。

萩原氏 カンボジア出身の萩原カナナと申します。難民として 33 年前に来日しました。来日時、8 歳だったのですが、日本に逃れてきた難民たちの子ども世代の中でも一番上の世代になります。私より下の世代は、カンボジア語が分からなくなって、日本語のみになってしまう。私より上だと、日本語があんまりわからないまま就職してしまう状況でしたので、ちょうど私の世代が境になると思います。よろしくお願いします。

富本氏 神奈川県がとりまとめている外国人人口統計から、カンボジア国籍について、人数が多い順に、自治体ごと（横浜市は区単位）に一覧にしてみました。

相模原市に登録されているカンボジアの方が最多となっています。県内全体の登録数は 1,559 人となっていますが、こうして見ると、みなさんの周りにカンボジアの方がいる事がおわかりになるかなと思います。ただ、萩原さんは現在日本国籍をお持ちという事で、日本人として戸籍上の登録があると、この外国人人口には含まれないので、もっとたくさんの方がいらっしゃると思えます。カナナさん、この一覧を見て、いかがでしょうか。

萩原氏 だいたい県営住宅でかたまって住んでいます。相模原市もそうですし、あと大和市、横浜市泉区も大きな団地のあるところだと思います。厚木市もそうですね。だいたいが大和定住促進センターから出た時に職安から紹介されて入居するのが雇用促進住宅になるんです。その後、県営住宅を申し込む流れだと思います。

富本氏 例えば、平塚市に住んでいても、仕事は他の町で働いているという場合もありますか。

萩原氏 平塚に住んでいる男性は秦野市や愛川町の自動車関連の会社等で自動車部品の製造に携わるケースが多いです。

富本氏 カンボジアの方たちは、今ご紹介があったように難民として来日した方というイメージがありますがけれども、難民の方たちが日本に来られてだいぶ時間が経っているので、カンボジアの方たちの中でも、大きく 3 つの種類に分けられるのではないかという話を紹介していただいてもいいですか。

萩原氏 第一のグループは難民です。カンボジア難民の来日はベトナム、ラオスより遅れて 1980 年から始まり、私たち家族が第一号として大和市の定住促進センターに入所しました。第二のグループは、母国から呼び寄せられた難民の家族や結婚相手です。定住促進センターは 1998 年に閉所したので、それ以降に来日した人は日本語学習の機会もありませんでした。日本で結婚相手が見つかりにくいため母国に帰って結婚し、呼び寄せるといふ形は今でも続いています。第三のグループは日本生まれの子どもたちで、ほとんどが日本語しかできないため、家庭の中で親子の共通の言語がないというのも問題になっています。

富本氏 結婚あるいは親類の呼び寄せで来日するということについてですが、私たちも事業で関わっていて、やはり結婚を目的に来る方がすごく多いと思います。カンボジアの方の中で、出来ればカンボジアの人と結婚したいという考えがまだ強いのですか。

萩原氏 そうですね。難民世代で来た人たちは日本に行き場を求めて来るので、少し日本語も習って、60 代ぐらいの人でも多少ひらがな・カタカナが読めたり、慣れていこうという意思はあるのですが、結婚を期に呼び寄せで来た人たちはカンボジアの戦後の環境で生きてきた人たちなので、あまり弱みを見せない。だからといって日本語も習っていない。せいぜい喋れて挨拶ぐらいです。馴染む時間がないまま、孤立してしまう。カンボジアに置いてきた家族も経済的に余裕がないので、自分の生活に加え、仕送りをしなくては行けない。日本の方と結婚すると何が駄目かと言うと、理解してもらえないんです。なんで向こうの家族や親戚に仕送りするんだって。そういう意味で、親御さんが子どもに同じ国の人と結婚して欲しいと思い、子どもたちもそういう考えになっていきます。

富本氏 私も実際に平塚での事業に関わるまでは、難民として来た方が多いのだろうという簡単な括り方をしてしまっていたのですが、結婚の為に来日し、すぐに子育てに忙しくなってしまうと、カンボジアの人たちとの付き合いだけでなかなか日本社会との接点がなく、日本語を勉強する機会もないという方が多いのだなと感じるようになりました。

そういうお父さん、お母さんの間の、日本生まれの子どもたちの学習環境についてはど

うお考えでしょうか。

萩原氏 学校で教えてもらった事を復習しようとしても、最初の取掛かりさえわからなくなってやめてしまう。共通して言えるのは文章問題を理解出来ないこと。読みが間違っただまとか、漢字は読み方が二通り、三通りあっても、それが一通りしか読めない。親に聞いてもわからない。

図工の授業で、例えばリースを作る時に、材料に使える物を持ってくるといいう指示があっても、外国の子たちは持ってこられないんです。日本の子はいろんなものを持って来て飾ったりするのを、忘れていたわけじゃなくて、わからない。目的がわからないので、結局先生が持って来た物とかお友達からわけてもらって作る。本人が考えて集めてきたものではないですね。

富本氏 図工の授業や、宿題などは、おそらく日本の家庭だと、お父さん、お母さんが手伝ってなんとかできる物が、カンボジアの方のご家庭では、日本語の理解が難しく、子どもが困ってしまうような事があると思います。

外国籍の方たちがいろいろと困った事がある時に、資料を翻訳して、保護者の方に届ければわかってもらえるかと思うのですが、資料が全部カンボジア語で書いてあれば問題は解決するでしょうか。

萩原氏 カンボジア語といってもいろいろあります。カンボジアは仏教国なので仏教語と、あと日本でいう謙譲語、王様と喋る時のすごく難しい言い回しと、あと普通の丁寧語と普通の一般語ですよ。そして、文章の言葉です。

カンボジアは、まだ落第制なんです。日本は成長していけばどんどん学年が上がっていきますが、カンボジアは試験を受けて、学年が上がるので、10歳になろうがお勉強出来なければそのままです。そのためカンボジア語が読めない人もいます。

富本氏 カンナさんは、学習支援サポーターなどのお仕事、活動のほかにも、ボランティアでたくさんの方に頼りにされて通訳をされています。通訳される時にどういうところに気をつけているか教えていただけますか。

萩原氏 日本の文章は難しく書きすぎている、あと説明も長いですよ。平仮名で書けば読めるじゃないかと思うかもしれないですけど、平仮名で長々と書かれても、どこで区切るのかわからない。だから、漢字を丸暗記している場合もあるんです。この漢字はこういう読み、こういう読みだっていう。漢字にルビふりが親切かと思います。挨拶文等は抜きでいいので、要所を説明してあげるような文章が一番いい。矢印などの図形を使うのも伝わりやすいと思います。

富本氏 日本人の人だと当然だと思うことも、カンボジアの人が理解するためには少し説明を加えたりしなければいけないのでしょうか。

萩原氏 分かっているかどうか、表情を見てあげてください。適当に「はいはい」と言ってしまうこともあるので、「ここまでわかりますか、大丈夫ですか。」と聞く。もう 1 回繰り返してあげるくらいが一番ありがたいですね。

富本氏 これからも、結婚して若い世代で来日するカンボジアの方たちもたくさんいると思いますが、呼び寄せで来日して小学校に編入する子どもたちも最近増えているのですか。

萩原氏 今、日本は少子化が進んでいますが、カンボジアの家庭で子どもが出来ない場合、カンボジアに住む親戚の子どもを養子にすることがあります。日本に連れてきたのはいいけれど、親が学校教育の仕組みがわかっておらず、学校に任せ放しになってしまい子どもが困ってしまう。授業参観に行かないのは当たり前ですし、先生方が困っているのが忘れ物が多いことと、宿題をやってこないこと。勉強も小学 1 年生の時からずっとわからないまま、中学でもついていけず、高校進学率も低いのが現状です。

富本氏 高校に入学できても定時制高校が多かったり、途中で辞めてしまうような子もいますか。

萩原氏 途中で辞めてしまうことはあまりないです。入学したら頑張って行ってくれると思います。

富本氏 小さい頃からサポートできる体制を整え、高校まで入れるような道筋が出来れば安心ということですね。

萩原氏 そうですね。逆に 1 年生ぐらいから日本語が出来るようになると、親子の立場も逆転してしまうことがあります。親が子どもを頼って通訳のために市役所に連れていったり。住所すら自分で書けない親も多いので、子どもに書いてもらうんです。

富本氏 神奈川県内で、というか日本国内でカンボジア語の相談窓口は、おそらく相模原市の国際交流ラウンジで週に 1 回やっているだけです。同じインドシナ三国でもベトナムとラオスについてはある程度対応できる場所があるけれども、カンボジア語は極端に相談出来る場所が少なく、萩原カンナさんのような方が支えてくださっているのかなと思います。今後、少しでもカンボジア語が出来る若者たちが、通訳・翻訳で活躍出来るよう

な仕組みが出来るといいのですが、役所の窓口で日本語がまったく出来ないカンボジアの方が来た時に、やさしい日本語を使ったり、図を描いたりというふうに工夫するとかなり伝わりますよね。

萩原氏 窓口が少ないのは、カンボジア人は犯罪も少ないし、問題を起こさないの、特に問題視される事が少ないんですね。

また、弱みも見せない。さっきも言ったように1年生の時分からわからなくても、そのままずっと持ち越したままです。その子どもたちが日本語の文章を読んで理解しているかと言うと、理解出来てないんですね。日本人の大人向けの文章だと、読めないカンボジア人の若者が多いです。



萩原氏（写真左）と富本氏（右）

第2部「実践事例の紹介～諸課題解決のための試み～かながわ国際交流財団の取り組みの中から」

講師：富本潤子氏（かながわ国際交流財団職員）

森ちえる氏（同上）

富本氏 ここからはパワーポイントを使って、当財団の事業と、いろいろな協力をした中で見てきた事をテーマとしてお示しして、第三部のグループワークでみなさんの方からアイデアを出していただければと思います。

パワーポイントの資料については、みなさんに A3 裏表でお配りしているので、これについて私と森で、交互に発表させていただきます。かながわ交流交際財団は県域で、みなさんに協力をいただきながらいろいろな事業を行っていますが、2009年度の前から平塚市にお伺いして、いろいろな事業をさせていただいています。

実は、平塚はブラジルの方が一番多いのですが、その他の特徴は、カンボジアの方がとても多いという事と、ポリビアの方が多いい事です。平塚市に横内団地という県営住宅がありまして、カンボジアの方を中心に、ベトナム、ラオス、ポリビア、ペルー、ブラジル、フィリピン、中国などの方が住んでいます。

学区の小学校の2割ぐらいの子どもたちが外国につながる、外国人集住地域です。平塚駅から北に車で20分ぐらい行ったところで寒川町や伊勢原市に隣接している地域です。財団がこの地域で事業を行うきっかけとなったのが文部科学省の、外国につながる不登校・就学の子どもの、就学サポートをするという事業で2009年から2011年度まで行

いました。横内地域に一軒家を借りて子どもたちの学習支援教室・架け橋教室を運営して
いましたのでそこで子どもたちとの繋がりが出来ました。

架け橋教室は、今は終了になってしまったのですが、引き続き平塚市教育委員会や、地
域のボランティアの方と、学校の中での支援や放課後の学習教室の運営に関わっています。

その中で見えてきたのが、子どもたちが課題を抱えているのはその背景にある保護者の
方や、外国籍の家庭の方が複合的な課題を抱えているからで、それを関係機関と連携しな
がら解決をしていかないと子どもたちの課題も解消されないのではないかという事です。

みなさんのお手元に外国人住民総合支援モデル事業という概念図をお配りしているんで
すが、キーワードを、「子どもを入口にした家族支援」とし、背景にある家庭の問題を、
どうやったら解決していけるかこの約 2 年間モデル事業として試行してきました。森の方
から紹介します。

森氏 森と申します。外国人住民調査を元にお話しさせていただきます。昨年度ですが、
先程お話もあった架け橋教室に来ていた子どもが、最後には 30 名近くいたんですけれど
も、その中から、インタビューについて承諾して下さった 19 世帯にインタビューをさせ
ていただきました。ここにある就労、制度利用、育児、情報、将来という分野でインタビ
ューしました。

まず、仕事第一という家庭が多く見られました。ただ、ハローワーク等ではなくて、ク
チコミで就職している非正規の雇用がほとんどでした。大変苦しい生活状況の家庭もあり
まして、共働きであれば 30 万円以上の収入の家庭もあるんですが、中には 10 万円ぐら
いの収入で、家族でなんとか頑張っていますという家庭もありました。外国人コミュニティ
の中で協力していて、近所の同国出身からなんとか助けを受けて生活しているという状況
も見えました。

また、母国への送金をしている家庭も多いです。ただ、それは収入のある時しか出来な
いので、今はもう母国への送金は出来ていないというような家庭もありました。また、車
を買ったり、パソコンやテレビ等、結構みなさん家に物があるんですけども、そういっ
た物をおそらくローンで購入されているので、健康保険料が払えず、病院に行くことをた
めらうという状況もありました。

また、制度利用、あるいは保険、110 番とか 119 番もどういう番号かを知らない、また、
保育園とか学童とかも経済的な理由から行くことができずに、小学生なら鍵っ子、保育園
は行かずに、家や知り合いの人に面倒見てもらう等の状況があります。

親子でのコミュニケーションも問題になっていまして、自分の母国の言葉を話すことを
なかなか率先して出来ない、親から話しかけられても、返事を日本語で返す家庭もありま
す。地域への参加についても少し聞き取りをしたんですが、子ども会やお祭りの参加はあ
るんですけども、なかなか主体的に参加する事はありません。ちょっと見に行くという
程度の参加が中心でした。

将来については、できれば大学に進んでほしいという希望を持っている方が多かったのですが、仕事が忙しく子どもに勉強を教えることもできないので、積極的に教育に参与するのは難しいようです。

インタビュー調査を通じて問題が様々な分野にわたっている事がわかりました。モデル事業は、それぞれの分野を横断的な連携の必要があるという事で、モデル事業では、検討委員会を組織して、事業をどうやって進めていくかを決めてきました。

検討会のメンバーには平塚市文化・交流課職員や、通訳・翻訳ボランティアバンクコーディネーター、平塚市教育委員会指導主事、社会福祉協議会の職員、地域福祉専門家に入っていました。通訳・翻訳バンクは、通訳・翻訳ボランティアの派遣を行っている平塚市の制度です。

この検討会でモデル事業として内容を検討し、外国人セミナーの実施、多文化サポーターの派遣、研修などを行ってきました。

工夫した点としては、例えば外国人住民を対象とした通訳付きのセミナーの広報では、多言語のチラシを作成し、外国人が経営する食材店やレストランに置いたり、日本国際協力センターなどが行う日本語教室の学習者に直接チラシを渡す機会を作るなど、地域内の外国人コミュニティとの接点を作るようにしました。次に、多文化サポーターですが、萩原カナさんのような多言語対応できるサポーターを行政窓口などに派遣する同行支援の仕組みを作りました。

その具体例として、例えば保健師や社会福祉士が家庭訪問をする際に、一緒に同行して、書類記入の補助や制度説明を母語で行います。子育て期の栄養指導や病児の食事制限などとても重要な場面で多言語対応をすることができました。また保育園入園前の面談や公営住宅の申込手続き、不登校の子どもの見守りや養護学校での相談、検診結果の報告等にもサポーターを派遣しました。同行支援以外にもセミナーの通訳や翻訳も依頼できるようにしました。

2、3ヶ月に1回程度ケース会議を実施し平塚市の社会福祉士、保健師の方にも参加していただいているので、外国人住民支援をしている方と専門職の方が繋がる場にもなっています。

今年度は平塚市の保健福祉研修で先程の外国人住民調査と、平塚市における外国人コミュニティの抱える課題について報告させていただきました。民生委員や主任児童委員が集まる会議、小・中学校の人権教育研修、平塚市の国際教育連絡協議会、通訳・翻訳ボランティアバンク等でもモデル事業について紹介させていただきました。

多言語情報の流通につきましては、今ではかなりの県内自治体のホームページに自動翻訳が導入されていたり、外国人向けのページがあります。しかし折角の有用な情報について外国人当事者の方が知らないという問題があります。また、職員の方自身が、自動翻訳や、外国人住民向けのページが存在を知らないという場合もあるので、これを積極的に使っていただけるように周知をしていきたいと思っています。

財団では INFO KANAGAWA という多言語情報メール配信サービスを月に 4 回多言語で配信をしています。例えば、今日本語ですと、スマートフォンのアプリ等で緊急地震速報の知らせがありますが、多言語ではなかなか対応できていません。今後、INFO KANAGAWA などを活用して災害情報を提供していきたいと考えています。

また、通知表とか入学説明会の資料等、市内で統一して使える情報を作成しました。これをさらに充実させて出来れば神奈川県内全体で共有できるような多言語資料リソース集としてとりまとめをしたいと考えています。

富本氏 今まで、モデル事業として平塚で色々な事業を行ってきましたが、事業の成果を活かして神奈川県内で普及させ、より一層質の高いものにしていきたいなと思っています。

翻訳資料を作っても、それが本当に必要な人の手元に届いて、必要な手続きに申し込みが出来るまでには、かなりハードルがあります。効率は悪いかもしれませんが、直接対面で外国人住民の方とお話をして、質問が出来るような機会を設けることも有効であると思っています。

外国人向けのセミナーや、情報提供の機会について具体的にお知らせしたいと思います。まず、一つ目については、先日横内公民館で通訳つきのライフプランセミナーというのを行いました。先程の調査で、やはり日本でのやりくりの仕方を知らない。そもそも収入が少ないので、なかなか経済的に困窮している状態から抜け出られないという外国人の方も多いです。日本のいろいろな知恵を知ってもらって、少しでも賢くお金を使う方法を学んでもらうという趣旨で、セミナーを行いました。国で金融広報中央委員会という、いろいろな広報資料を日本語で出している、消費生活アドバイザーの方に来ていただいて、お話をさせていただきました。収支のバランスについてはみなさん残念ながら赤字になってしまったんですが、赤字になっているという事実を知ってもらう機会にはなったかと思います。

あとは、やはり大学に行って欲しいという望みはあっても、具体的にどういう手段があって、どのくらいのお金がかかるのかということを知っている方は非常に少ないので、教育費用については一番質問が出た部分でした。お金の事についてはすごく関心が高く、通訳も用意をしたので、参加者が多かったのですが、やはり南米の方々とインドシナの方々とやはりニーズが大きく異なりました。カンボジアの方たちからは、本当に生活が大変でどうすればいいのかという切実な悩みも寄せられました。

また、日本語が読めず契約内容をよく理解しないまま家を購入したりローンを組んでしまっただ後悔していた方もいました。

財団では過去にも日本の教育制度や大学進学をテーマとした教育関連のガイダンスを県内数カ所で開催しました。その中で感じるのは、高校入学のためには入学試験を合格しなければならないことなど基本的な事項を知らなかったり、成績をの 5 と 1 で 1 が一番評価が高いと全く勘違いされている場合も多く、直接説明することで誤解を解く機会になったかと思っています。

教育はとても関心の高い分野で参加者も多いのですが、例えばカトリック教会で外国語のミサが終わった後に教会敷地内でガイダンスを行ったりという工夫をしました。外国人の方が多く集まる場に出かけることで有用な情報を直接手渡すことができると思います。また新たな広報手段としてフェイスブック等も活用できると思います。

就労、特に介護の仕事についても関心が高いため、実際に現場で働いている方の体験談を交えて仕事の内容を紹介するようなワークショップを行ったところ、とても好評でした。

こちらの写真は保険と健康に関するセミナーです。外国人の方は健康診断を受けることも少なく、自分の健康状態を確認したり、気をつけたりする機会がありません。子どもでも栄養状態があまりよくない場合の子もいるので、健康についてもっと意識を高めて欲しいと思います。

例えば、がん検診無料などのお知らせは家には届いているはずですが、それが全部日本語で書かれているので読めない。重要そうな手紙が来るととりあえずためておき、もし日本語が出来る友達や親戚に会えたら、読んでもらったり、記入してもらったりするけれども、そういう機会がなくて、たまってしまうとそれも捨ててしまうという話もありました。おそらく重要な行政からのお知らせが、残念ながら読まれず、そのままになってしまうという事が多いと思います。

日本語が読めなくてもピンクの封筒なら 40 代のがん検診、というように封筒の色でお知らせの内容を判断する方法もあります。セミナーでは、平塚市の保健師にも協力していただき、健康サービスの概要や利用方法についても具体的に説明していただきました。

今年度、県の委託を受けまして、災害多言語支援センター設置訓練と自主防災訓練を、平塚市の自治会の防災訓練に併せて実施しました。通訳の方をお願いしたところ、多くの外国人住民の参加があり、起震車体験などにも参加されていました。平塚市は平坦なところが多く、津波の危険があります。そのため避難場所になっている学校の屋上に、実際にヘルメットをかぶって登ってみました。そのような体験を通じて、地震について意識する機会になったかと思います。

今年度発表された平塚市の地域防災計画の中では災害多言語支援センターを設置することが明記され、外国人住民に対する支援についての項目も多く盛り込まれました。

外国人向けのいろいろな取り組みについて具体的な例を紹介させていただきました。直接外国人の方たちと日常的に接点を持って、いつも寄り添うというのは難しいですし、同行支援というのももちろん理想的ではありますが、人材もお金もそこまでないというのが現状だと思います。後半のグループワークでは、限られた資源の中で何が出来るかということについて、アイデアを出し合う時間になればと思います。私たちもグループの入れさせていただきますので、是非いろいろ教えていただければと思います。第二部は以上になります。

(以上)